AFS NEWS

高校生留学のパイオニア

AFS Intercultural Programs

エイ・エフ・エス ニュース

http://www.afs.or.jp/ | 2005 Summer No.121

発行人 財団法人エイ・エフ・エス日本協会　事務局長●大山 守雄　編集長●河野 淳子　編集●広報委員会
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-16 2F　☎03-3357-5831　FAX03-3357-5841　E-mail info@afs.or.jp

新役員会スタート

今後2年間を任期とするAFS日本協会の新役員が決定しました。

異文化交流の促進にむけて

理事長 垂水 公正

当協会の活動に初めて参加した平成15年４月からの２年間は、実に出来事の多い、従って新しく学ぶことしきりの任期でした。

対内的には、平成12年度以降から生じた赤字財政の立て直しと組織改革への対処でした。協会役職員の不断の努力により、平成16年度には収支予算の改善をもたらし、構造改革の目標実現に向けて着実に前進しています。また、昨年６月に石川副理事長が、一昨年10月に新谷理事・事務局長が協会役員を辞任されました。私の仕事上の師とでもいうべき方々との別離でした。対外的には、当協会50周年記念関連行事の実施と、「AFS世界会議2004」の日本への招致という大イベントもあり、これらを通じてAFS国際本部幹部や世界各地の関係者、日本各地のボランティアの熱き思いをじかに肌で感じることもできました。

このたび、私は当協会の理事長に再選されました。先の任期中の大きな出来事のフォローアップがなお続くなかで、異文化交流促進という役割の重要性をあらためて痛感しています。若い世代の人々に異文化理解と世界平和の大切さを再確認してもらうとともに、諸々の課題に取り組み、今なお混迷を深める国際情勢のなかで、AFSのためにいささかの職責を果たせるよう努めてまいります。引き続き、皆さまの一段のご理解とご支援をお願い申し上げます。

今後の発展への3つの目標

副理事長 井手 秀彦（運営委員長・財務委員長）

平成16年度は、AFS日本協会にとって50周年の記念すべき年でした。なかでも、NHK教育テレビ番組での記念式典やパネルディスカッションの放送は、AFSの認知度を上げる効果がありました。一連の事業を通じて、われわれは高校生交換留学の意義を再確認し、次の50年に向けた新たなスタートを切ることができました。また、平成16年度は最優先課題であった財政再建を強力に推進しました。平成16年度事業収支および最終収支差額は、ともに大幅黒字を達成でき、財務改革は着実に成果をあげています。その結果、平成12年度以降の累損の約半分を解消し、財務基盤は改善しました。派遣・受入事業は堅実な運営を実施し、ほぼ当初の計画を達成できました。

平成17年度は３つの目標に重点的に取り組みます。第１に、財務改革をすすめて強固な財務基盤作りへの努力を続け、累損一掃の速やかな実現により財政再建を完了したいと思います。第２は、対外的な広報活動を充実させ、派遣・受入事業の発展を目指すとともに、広報と連携した寄付活動を推進します。そのためにも、事務局の体制を一部変更します。第３に、奨学金制度の新規開発と既存プログラムの拡充をすすめ、魅力あるプログラムを提供していきます。これらを通して、AFS日本協会の健全な発展に貢献していきたいと願っております。多くのAFS関係者皆さまのご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

新役員

2005年4月1日現在

理事長	垂水 公正	再	（財）日本フォスター・プラン協会 会長・理事長	監事	野村 彰男	再	国際連合広報センター 所長（YP8）
副理事長	井手 秀彦	再	富士投信投資顧問（株） 常務取締役（YP11）		ロバート フェルドマン	新	モルガン・スタンレー証券会社 主席エコノミスト
理事	大山 守雄	再	（財）エイ・エフ・エス日本協会 事務局長（YP14）		グレン フクシマ	再	エアバス・ジャパン（株） 代表取締役社長
	小池 泰子	再	新潟市教育委員、AFS新潟県代表（YP14）		船田 千絵	新	AFS栃木支部長（YP15）
	小林 啓子	新	（株）ILCC 取締役（YP14）		松尾 文夫	新	（有）松尾文夫事務所 代表取締役（ジャーナリスト）
	辻 幸夫	再	慶應義塾大学教授（YP21）		森田 祐理	新	（株）アドバンテスト 常務執行役員・管理本部長（YP11）
	津田 倫男	再	（株）フレイムワーク・マネジメント 代表取締役（YP21）		後藤 英生	再	環境エンジニアリング（株） 代表取締役社長（YP6）
	鳥飼 玖美子	再	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科教授（YP10）		濱四津 尚文	再	浜四津法律事務所 弁護士（YP7）
	中嶋 嶺雄	新	国際教養大学 理事長・学長、AFS秋田支部顧問				

新：今期初就任　再：前期より引き続き就任

次の4名の方々は、3月末をもって理事を退任されました。これまでのご協力に対し心からお礼申し上げます。
武富將、花輪宗命、三好正也、渡辺亘之（敬称略・50音順）

AFSリターニーの力で
スリランカとの交流再開

2005年３月来日の年間受入生の一人として、スリランカからテジャニ・バーギャ・ウィーラシンハさんを受け入れることとなりました。80年代には世界各国と留学生の派遣・受け入れをしていたスリランカでしたが、激化してきた内戦の影響により、AFSスリランカは現在も活動を休止しています。活動休止以前は、日本との交流も盛んに行われており、スリランカからの受入生は42名（年間37名、短期５名）、日本からの年間派遣生は17名を数えています。

今回の交流再開には、1985～86年にニュージーランドに留学していた小谷（旧姓：秋沢）淳子さん（YP32）とエシャンタ・アーリアダーサさん（AFSスリランカから派遣）とが設立・運営している国際交流団体「スプートニク・インターナショナル」（www.sputnik-international.jp）の協力がありました。スプートニクは、主にスリランカを対象とした国際交流の支援、教育水準の向上のための経済的、物資的、人的援助に力を入れているボランティア団体です。今回の年間受入生は、スプートニク理事長の内海勝統さんが代表取締役会長の（株）ジンテックから奨学金を頂きました。また、生徒の選考、オリエンテーション、渡航準備などは、すべてスリランカでエシャンタさんが担当しました。「内戦も落ち着いたので、AFSスリランカの活動再開に向けてリターニーを取りまとめていきたい」と、エシャンタさんは日本との交流に意欲を示しています。

当協会も、こうした動きに積極的に協力し、交流国の拡大に努めたいと考えています。

（事務局　大野博通）

事前打ち合わせのために訪日したエシャンタさん（左から2番目）。
昨年10月、日本協会職員と

新規プログラムスタート

AFS日本協会は今年度、大学生および社会人を対象とした新規プログラムをスタートします。大学生から65歳ぐらいまでの方（心身ともに健康で異文化体験に興味があり、意欲と柔軟性がある方）が対象です。当協会では、新しい年齢層を対象としたプログラムを開発することで、AFS活動のさらなる活性化をはかっていきたいと考えています。

オーストラリア教育事情体験プログラム（期間：8月3日～19日）

ホストファミリーとの生活体験はもとより、学校訪問や授業への参加、教育機関の視察、受入地域でのAFS行事への参加などを通じて、オーストラリアの文化や教育制度に対する理解を深めるためのプログラムです。詳細はホームページ（www.afs.or.jp/s-program/sp/ausedu.html）をご覧ください。

アルゼンチン18プラス・プログラム（仮称）（期間：2月上旬から約1ヵ月）

ホームステイをしながら、午前中はスペイン語研修（必須）、午後からはスポーツ（サッカー／ゴルフ）教室、アルゼンチン・タンゴ教室、料理学校またはボランティア活動（日本語教師、養護施設での活動）などを選択して体験できるプログラムを計画中です。詳しくは決定次第ホームページなどでお知らせいたします。

EU（欧州連合）諸国とのボランティア・エクスチェンジ（2005年限定）（期間：夏季約1ヵ月）

18～30歳で、AFSのボランティア活動を１年以上している方が対象です。

本件に関するお問い合わせ・お申し込み：プログラム本部　☎ 03-3357-5833

YP…年間プログラム　リターニー…AFSプログラムの帰国生

海外のAFSより

昨年末から今年春にかけて、さまざまな目的で海外のスタッフがAFS日本協会を訪れました。

日独交流拡大に絶好の機会

AFSドイツ事務局長
ミック・ペータースマン

AFSドイツのスタッフとボランティアは２月下旬～３月上旬に日本を訪問し、各地でボランティア会議に出席しました。

AFSドイツのプログラム参加者数は、この数年で５～10%増えていますが、残念ながら日本との交流に関してはそれほど伸びていません。「日本におけるドイツ年2005/2006」(注)を機に、多くの日本の若者がEU諸国に関心を持ってくれることを期待しています。

国と国との間の文化的相違――これは大きなチャレンジですが、同時に、違いから学ぶ良いチャンスでもあります。今回の訪問では、受入生のオリエンテーションを企画する学生ボランティアたちと、そのことについて意見を交換しました。国を越えたボランティア同士の交流により、AFSはさらに異文化理解教育の促進に向けて力をつけていけるのではないでしょうか。

今夏、EU８カ国と日本との間でボランティア・エクスチェンジが予定されています。AFSドイツが９月と12月に行うボランティア会議と支部長会議には、日本のボランティアやスタッフも招待しています。こうした動きが日独交流の活発化につながることを願っています。

(注) 2005年４月から2006年３月まで日本全国でドイツの文化・科学・経済の分野を中心とした催しが開催される。http://www.doitsu-nen.jp/

AFSドイツのボランティアとスタッフは、2月25日に来日。3月6日まで岐阜、名古屋、京都、東京、横浜を訪問し、学生ボランティアとの意見交換や、ホストファミリー オリエンテーションの見学をした。写真は名古屋の学生との懇親風景

「2006日豪交流年」を機に両国の関係強化を！

AFSオーストラリア　企画・運営担当部長
リンダル・マーシャル

2006年は日豪交流年(注)です。これを機に日本との関係強化をはかるべく、プログラム担当のジェイソン・ミンティと私は昨年12月、日本を訪れました。

2003年７月にオーストラリアのハワード首相が来日した際に小泉総理大臣と会談を行い、日豪友好協力基本条約30周年を記念して、2006年に一連の交流活動を両国間で行うことに合意したのです。

AFSオーストラリアは今年から、「世界平和のためのワールドスクール」という新プログラムを開始する予定です。これは世界中の教師や生徒が集い、10日間のフォーラムで世界平和について考えるという企画で、日本からの参加も実現することを願っています。

日豪交流年を機に、ぜひ両国間の交流を深めましょう。

(注) 日濠交流年については以下のホームページで詳しく紹介されています。
http://www.arts.australia.or.jp/initiatives_yoe.html

現場を体験する貴重な機会に

AFSアメリカ西部事務所　応募担当アドバイザー
チャン・マクドナルド

２月上旬、アメリカからの年間受入生の帰国時シャペロン（引率者）として、日本を初めて訪問しました。私はアメリカ西部事務所で、応募者の書類に目を通し、各国のAFS事務所との間で生徒の派遣や受け入れを調整する仕事をしています。今回の訪問では、生徒たちが異文化体験を送り成長した姿をこの目で確かめることができて、大変貴重な経験でした。この体験を生かして今後も業務に励んでいくつもりです。

よろしくお願いします！

AFS国際本部　アジア・太平洋地域担当部長
エリザベス・カイサー

私は、アジア・太平洋地域の担当として、昨年12月にAFS国際本部スタッフの仲間入りをしました。「Financially Viable Growth with Quality（財政基盤に裏づけられた質を伴う成長）」というAFS組織全体の目標を達成するために、アジア・太平洋地域のAFSを支援していくことが主な仕事です。AFSのように社会的に影響力のある組織の一員として、平和で公正な世界の実現に向けて一翼を担えることを大変誇りに思っています。どうぞよろしくお願いします。

活躍するリターニー

昨年末に起きたスマトラ島沖地震による津波被害では、多くの方々が犠牲になりました。被害の大きいスリランカ東部やタイのプーケットで医療や取材活動にあたられたAFSリターニーお2人にご寄稿いただきました。

スリランカでの医療協力

鳥取県福祉保健部医師
金井 要（YP27 '80-81米国ミネソタ州）

スマトラ島沖地震後の津波被害を受けたスリランカで、JICA国際緊急援助隊のスリランカ医療チーム２次隊に、１月5日から18日までの約２週間参加した。被害の大きかった東部のアンパラに行き、医師４人を含む30人ほどの隊員で延べ1,321人の患者を治療した。

スリランカにとって津波は500年ぶりで、国民に津波についての知識はない。また、学校に水泳の授業はなく、泳ぎ方を知らないためにおぼれた人も多かったらしい。さらに状況を悪くしたことは、津波が襲う前の引潮のような海岸に、手づかみで魚を捕まえようとした漁師やその家族がたくさんいたことだ。一族100名以上流されたという老婦人や、子供３人のうち２人が見つからないという母親が診療中に涙する場面もあり、メンタル面での対応が必要だと感じた。

言葉では苦労した。東部はタミール語圏で、ほとんどの患者はタミール語しか話せない。西部コロンボから同行した通訳が、私たちの話す日本語や英語をシンハラ語（西部の主要言語）に訳し、被災地で協力を申し出たボランティアが、シンハラ語をタミール語に訳すという２段階の通訳が行われた。われわれも、覚えたての「エンデ？（どこ）」や「ノーダ（痛い）」を駆使し、イントネーションを微妙に変えて、「エンデ、ノーダ？（どこが痛い）」や「ノーダ！（痛いのはここか）」と患者に質問をした場面もあった。

私にとってスリランカは、以前３年間生活したことがあり、馴染みやすい国だったが、隊員のなかには生活環境の変化（毎食の刺激的なスリランカ・カレー、簡易ベッドでの睡眠、30度以上の気温など）に苦労した人もいた。全体としては体力勝負のミッションだったと思う。

最後に、被害を受けた方々の一日も早い回復と、不幸にして亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈りいたします。

写真上：診療中の金井さん　下：現地の子供たち

津波取材を続けて

NHKバンコク支局記者
榎原 美樹（YP27 '80-81米国アーカンソー州）

「『サシミ』は知っていても、『ツナミ』は知らなかった」～冗談のようだが、津波に被災したタイでつくられた「津波の歌」の一節だ。津波は、その存在さえ知らぬ人々を飲み込んだ。当日の朝。バンコクでビルの21階に住んでいる私は、壁から「パリッ、パリッ」という音がしてビル全体が揺れているのに気がつき、階段を駆け下りた。まもなく、「プーケットで死者多数」という情報が入り始めたが、当初「嵐」「洪水」という言葉で表現されたため、要領がつかめない。その日のうちに現地に急行し、取材が始まった。島の病院に到着して、被害の甚大さは私の予想を遥かに超えている、と鳥肌が立った。水着のまま次々とかつぎ込まれるけが人。「家族で来たのに僕だけが生き残った」と取り乱す外国人男性。屋外に設けられた掲示板の患者名簿で、友人の名前を泣きながら探す人。全体状況を伝えきることは無理でも、人々の悲しみや困難、行方不明の肉親を探す家族の努力、地元タイ人たちが必死で差し伸べる救いの手。その一端を少しでも日本に伝えようと、各地に中継施設を運んで放送を続けた。「小さい息子が僕の手を離れ、波に浮いていってしまう姿が目に焼きついているのです」息子を見つけるまで、被災地を離れようとしなかったノルウェー人男性の言葉だ。戦地や災害地を取材した経験はあったけれど、こんなに何度も泣いた取材は初めてだった。死者・行方不明者はタイだけでも8,500人。津波取材はまだ終わらない。

写真：バンコク駐在中の榎原さん

今年2月まで京都で舞踊活動を行っていたインドネシアのバンダ・アチェ出身のマクサルミナ（通称メックス）さんは、'91-92にインドネシアから米国へ留学した元AFS生。今回の災害で多くの友人を亡くしました。現在はバンダ・アチェに戻って国連で働きながら、被災した子供たちの救援活動を行っているそうです。彼のホームページでは、バンダ・アチェの被災者に対する支援をよびかけています。

http://www.mex74.com/

生活や考え方を変えたＡＦＳとの出会い

ある日娘に留学したいと言われて不意に訪れたAFSとの出会い。不安、葛藤、新たな体験を通じて異文化理解が深まったという沼本さん。初めてのホストファミリー体験がきっかけで、その後10年以上も各国の留学生受け入れを続けてきた浅田さん。AFS体験は決して留学する生徒だけのものではありません。

かけがえのない1年

派遣生保護者

沼本 美代子（茨城支部）

娘が突然留学したいと言った時、夫は“ええっ!!”と驚きと喜びを隠せない様子でしたが、私は内心、この子に果たして１年もやって行けるのだろうかと戸惑いを覚えました。でも、家族で話し合った結果、娘の決心が固かったので、同意いたしました。第１希望がかなわず、派遣国がタイに決まった時に、娘はがっかりして気持ちが揺らぎましたが、夫や周りの人たちからタイという国のことをいろいろ聞いて思い直し、行くことを決意しました。

最初の３ヵ月は、言葉の壁や食事、タイと日本の生活や考え方の違い、家族との相性の問題から何度も連絡がありました。その都度、私たちは心の中では泣きたい、飛んで行きたい気持ちを抑えて、娘に異文化を理解するように、周りのすべての人に感謝するように、言葉が通じなければいつも笑顔で接するようにとアドバイスしましたが、その後、ホストファミリーチェンジをさせていただきました。家庭も学校も地域も変わり、仲良くなった友達とも別れ、また一からスタートした生活は、友達もなかなかできず最初は大変だったようですが、タイの暮らしには慣れてきたので、自分なりの過ごし方や楽しみ方も出来るようになっていました。時々ホストファミリーもいろいろな所へ連れて行ってくれたり、AFSのキャンプなど違う場所で各国の留学生と接したりして、たくさんの楽しい体験をするにつれ、後半はほとんど連絡がこなくなりました。スマトラ沖の津波の時は、異地域交換でたまたまプーケットにおり、私たちは大変心配しましたが、幸いにも難を免れ、少しだけですが日本人の通訳代わりのボランティアも経験しました。

２月に留学を無事に終えた娘の顔を見た時は、ほっと安心いたしました。この10ヵ月半、娘にとっては今まで経験したことのない様々な貴重な体験をし、精神的な成長は計り知れないものがあると思われます。また、家族もその間、６ヵ月ですがマレーシアの留学生を受け入れたこともあり、異文化に触れ、民族の違いも経験し、この１年はかけがえのない、充実した良い年になりました。この経験を通し、多くのボランティアで成り立つ50年の歴史に培われたAFSという留学組織のすばらしさと大変さを痛感いたしました。国際交流と一言でいうのは簡単ですが、時間と労力をかけることで若い人たちが育っていき、世界の平和につながると思うと、少しでもお役に立ちたい気持ちがわいてきます。

タイ留学中の沼本早智さん（前列中央）。ホストスクールで

沼本さんの一年は、高留連（全国高校生留学・交流団体連絡協議会）が制作したDVDでも紹介されています。

ハミッシュとの出会い

ホストファミリー

浅田 光明（東海支部）

1993年12月、私たち家族４人は期待と少しの不安を感じながら名古屋空港に向かいました。到着ロビーにはすでに何組かの家族が生徒たちの出てくるのを待っています。これから２ヵ月間一緒に暮らすのだから気持ちの良い子が来てくれるといいなと願いながら出口をひたすら見つめていました。しばらくすると長身の彼の姿が現れました。私たちは彼の身長が197センチであることを知らされていたので、それがハミッシュであることがすぐにわかりました。彼の人なつこいこぼれるような笑顔で私た

ちの不安が消え去りました。彼とならばきっとうまくやっていける。こうして私たちの初めての留学生受け入れが始まったのです。

はじめは言葉が互いにわからず、和英と英和の辞書を繰りながらのやり取りでしたが、そのうち、何となくお互いの意志が通じるようになり、不便を感じなくなるのにさして時間はかかりませんでした。初めてレストランでアイスクリームを食べた時には、出てきたクリームに、「おお、小さい！」と驚き、支払いの時には、「おお、高い！」という具合に、故郷オーストラリアとの違いをいろいろ発見したようです。そうした小さな事柄からも、私たち双方は互いの国の違いを実感として認識することができました。彼には毎日たくさんの新発見があり、私たちにも同じくらいの新発見がありました。それらのことを毎晩のように話し合っては笑いました。

あっという間の２ヵ月が過ぎ、我が家に幸せの風をまき散らして彼は去りました。翌朝、出窓の上に花束を見つけました。「僕をお母さんの家に泊めてくれてありがとう。」という日本語の手紙が添えられ、恥ずかしがりの彼らしさがあふれていました。

私たちがAFSを知ったのはほんの偶然の出来事からです。93年の春、愛知県の農業センターに花見に出かけた時のことでした。外国の少年を連れたご夫婦と出会い、ホームステイですかと尋ねたのがはじまりでした。そしてハミッシュに出会い、彼のさわやかさと、優しさと、ホストをする楽しさが、私たちのその後の生活を決めることになったのです。

その後の11年間、オーストラリア、ニュージーランド、インドネシア、中国、カナダ、アメリカ、ボリビア、パラグアイの８ヵ国から年間・短期あわせて12名のAFS生（全員男の子です）を毎年、受け入れてきました。そして、みんな我が家の息子になりました。そのうちの何人かは、その後も、「ただいま」の声とともに、我が家へ里帰りしています。

私たちに幸せな日々を与えてくれたAFSと、あの時出会ったご夫婦に心から感謝しています。

再訪日したハミッシュ。浅田さんと名古屋城で

浅田さんは今年、定年を機にホストファミリーも卒業だそうです。お子様が女の子ばかりなので、受け入れる留学生は、いつも男の子というのもユニークですね。

交換留学は異文化に対する意識を大きく変え、異文化適応能力を培う

～AFS留学体験の教育的成果についての調査結果より～

AFS国際本部は、2002年夏出発組の生徒を対象に行ったAFS留学体験の教育的成果についての調査結果を発表しました。さらなる分析が予定されていますが、今回の発表の概要をご紹介します。

※本調査は、AFS国際本部の後援とAFS加盟国の協力のもとに、異文化コミュニケーション学者ミッチー・ハマー氏によって実施された。

調査対象: オーストリア、ブラジル、コスタリカ、エクアドル、ドイツ、香港、イタリア、日本、アメリカの9ヵ国間で相互に派遣・受け入れされたAFS生1,500名およびその保護者、ホストファミリー、本国の友人600名。

調査方法: アンケート形式で、留学直前、帰国直後、帰国8ヵ月後の3回実施。AFS生の一部にはある設問への自由記述回答を提出してもらった。
ハマー氏が開発した異文化認識を測る調査方法によって、AFS留学体験が参加生にもたらす教育的成果（異文化理解と適応のスキルをどの程度身につけたか、異文化をどう認識しているか）を測定。

この調査により、AFS生が10ヵ月間の留学で飛躍的に身につけたものは、異文化を理解しようとする力、受入国の文化の理解、受入国の言語の習得、異文化の人々と積極的に交流する能力、国際的なネットワーク構築と様々な国の友人との友情であるという結果が得られました。興味深いのは、出発時に異文化理解・認識度がある程度高かったグループよりも、むしろ低いとされたグループの生徒たちに、大きな伸びが見られたことです。言語の習得と適応の関係については、これまで言われてきたように、言語の習得が進むにつれて異文化で積極的に交流する力と受入国の文化への理解が進むという関連性が実証されました。

「留学によってAFS生が受けるインパクトは非常に大きく、異文化を理解する力を伸ばす。AFS体験は偏見や自国主義を減少させ、他の文化への興味を増大させる。また、『私達vs彼ら』というような対極論で文化間の違いをとらえることがなくなり、共通点の発見により文化の壁を超えようとする」とハマー氏は述べています。

最後に、この調査にご協力いただきました49期夏組オーストリア・エクアドル・イタリア・ドイツ・アメリカ派遣生とその保護者の皆様、並びに2002年秋受入オーストリア生のホストファミリーの皆さまには、この場を借りて厚くお礼申し上げます。（事務局　橋本成子）

※ハマー氏の調査報告書（英文）はホームページでご覧になれます。

AFSキャンプで夏を変えよう！

2005年度浜松キャンプコミッティー　岡本将人

留学はしてみたいけど、外国に行ったこともないし、外国人と話したこともない。世界は狭くなったというけど、相変わらず周りには日本人しかいない。国際交流って一体何だろう。国際交流が大切なのはわかるけど、自分には無縁のこと。そう思っていました、あの夏までは。

2004年夏。様々な国からの留学生と日本人高校生が一堂に会し、5日間を共に過ごしました。初めはぎこちなかった笑顔と会話も、日を重ねるにつれ、ほぐれていきました。

国際交流というと、文化や考え方の違いばかりが強調されますが、そのような堅苦しいものばかりではありません。同年代の高校生が集まると、音楽や恋の話で盛り上がります。国は違っても考えることは同じです。

外国に対して抱いていた偏見も少しずつ変わっていきました。シャイなアメリカ人がいます。ヒップホップが好きなマレーシア人がいます。一緒にご飯を食べ、遊び、お風呂に入り、星空を眺めました。寝る間を惜しんで、時には真剣に語り合いました。

あの5日間で、自分の中の何かが変わりました。言葉はあまり通じなかったけど、私たちには、消えることのない友情が芽生えました。世界中に友達がいます。あの時、ためらわずに一歩踏み出して良かったと思います。

今年は浜松でキャンプが行われます。ウォークラリーやスポーツ、ダンス、ディスカッション、様々なアクティビティーを通じて交流を深めます。長い夏休み、5日間を浜松で過ごしませんか?

キャンプに来れば夏が変わる。夏が変わればあなたが変わる。あなたが変われば世界が変わる。さあ、国際交流、始めましょう。

2005年夏 全国のキャンプ・セミナーのお知らせ

1.主催支部　2.開催場所　3.実施日　4.参加対象　5.参加費　6.問い合わせ先

サマーキャンプ
1 帯広支部
2 清水町 フロイデー コティージ
3 7月30日～31日（1泊2日）
4 AFS活動に興味のある方
5 未定
6 帯広支部　tel: 0155-34-4551（馬場）
e-mail: obihiro-camp@afs.or.jp

AFSみちのくサマーキャンプ
1 盛岡支部
2 岩手県大東町室根高原「大東ふるさと分校」
3 7月29日～31日（2泊3日）
4 中学生・高校生
5 12,000円
6 盛岡支部　tel/fax: 019-697-7565
e-mail: morioka-camp@afs.or.jp

浜松インターナショナルキャンプ2005
1 東日本事務所
2 静岡県立観音山少年自然の家
3 8月8日～12日（4泊5日）
4 高校就学年齢者
5 30,000円
6 東日本事務所　浜松キャンプ係　tel: 03-3357-5842
e-mail: hamamatsu@afs.or.jp

フジサマーキャンプ2005
1 神奈川支部
2 国立中央青年の家「富士のさと」（静岡県御殿場市）
3 2004年8月5日～8日（3泊4日）
4 高校就学年齢者
5 24,000円
6 神奈川支部長　仲村邦子　tel/fax: 045-413-1765
e-mail: fuji-summer-camp@afs.or.jp

高校生のための国際理解セミナー
1 新潟支部
2 新潟市万代市民会館など
3 7月16・17・18日の3日間
4 高校生
5 1,000円（その他 BBQ食材実費負担）
6 小池泰子　tel: 025-231-4185　fax: 025-231-4180
e-mail: niigata-seminar@afs.or.jp

東海国際交流キャンプ
1 名古屋学生部
2 岐阜県郡上市美並町高砂　粥川の森キャンプ場
3 8月2日～5日（3泊4日）
4 中部地区在住の中学3年生～高校3年生
5 25,000円（現地集合は20,000円）
6 名古屋事務所 tel: 052-807-7338
e-mail: info-nagoya@afs.or.jp

インターナショナルサマーキャンプ '05
1 関西支部
2 国立曽爾少年自然の家（奈良県宇陀郡曽爾村）
3 8月9日～12日（3泊4日）
4 中学3年生～高校3年生
5 2万円前後（予定）
6 学生責任者　冨松 永　tel: 090-3678-0235
e-mail: kansai@afs.or.jp

AFSインターナショナルサマーキャンプ '05
1 京都支部
2 滋賀県湖南市（旧甲賀郡甲西町）青少年自然道場
3 8月2日～5日
4 中学3年生～高校3年生
5 22,000円
6 土岡由佳　tel: 090-1954-7971
e-mail: afs_kyoto_camp05@hotmail.co.jp

50周年記念奨学金の運用について

50周年記念事業の一環として実施いたしました50周年記念奨学金の募金活動では、皆さまの深いご理解とご支援のもと、8,029,000円（継続的自動振替分480,000円を含む）ものご寄付をいただきました。この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

募金の趣旨にてご案内申し上げたとおり、この浄財は異文化交流に意欲的かつ支援を必要としている参加生を支援するために、有効に活用されなくてはなりません。日本協会では、その運用方法について協議を重ねてまいりました。細部においては今後もさらなる議論を必要としますが、基本方針としては、以下のように運用させていただきたいと考えております。

1. 奨学生1名の受け入れに約100万円必要となるため、現在の募金額を前提として、年間4名を2006年3月より2年間継続して受け入れる。3年目以降の受入数については、従来からの「AFS日本協会奨学金」と統合して運営する方向で検討したい。
2. 初年度の受入対象国はインドとスリランカの2ヵ国とし、奨学生およびその保護者へのサポート態勢作りを進める。　条件が整えば、モンゴル、ネパール、パキスタンも検討対象とする。
3. 当該基金の事業実施報告（収支および受入生・受入支部など）は、AFS　NEWSやホームページなどへの掲載により関係者に周知する。

いずれは上記受入対象国において、AFS組織が立ち上がることを期待しています。そのためには、この奨学金制度が長期間継続して運営される必要があり、皆さまの継続的なご支援をお願いしたいと思います。

ご参考までに現在運営されている奨学金による受入プログラムをご紹介します。この他にも企業・財団・篤志家からのお申し出が寄せられており、全体としてはさらにスケールの大きな「奨学金制度」として運営されることになります。AFSのミッション遂行に向けて、皆さまの変わらぬご支援をお願いいたします。

寄付金による「受入奨学金制度」の現状

奨学金	財源	対象国	年間受入数
AFS日本協会奨学金	指定寄付	受入強化国	3名
AFS2期生奨学金	AFS2期生指定寄付	受入強化国	1名
YOSHI基金奨学金	指定寄付	アメリカ	1名
ジンテック奨学金	（株）ジンテック	スリランカ	1名
Akiko's Wish奨学金	篠原一博氏	アセアン諸国	1名

注
・企業・財団などから資金提供を受けた受託事業は含まれていません。
・受入強化国：これまでに東欧・アジア・中南米より受け入れてきました。

企業の社会貢献について

企業の社会貢献は消費者に選ばれるための条件になりつつあります。奨学金は使途が明確である、企業名を冠とした命名ができる、地域との結びつきを深めるなど、企業にとって意味のある社会貢献策といえます。読者の皆さんのお勤め先やお知り合いの企業で社会貢献を検討されるところがありましたら、ぜひ奨学金をはじめとするAFSへの支援を推薦していただければ幸いです。ご連絡をいただければ、企業とお話しをさせていただきます。

お問い合わせは　事務局募金担当（☎ 03-3357-5831）まで

AFS友の会 かわら版

「AFS友の会」事務局
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-16 2F
財団法人エイ・エフ・エス日本協会内
FAX : 03-3357-5841
E-mail : tomo@afs.or.jp

6年目を迎えた友の会

AFS友の会は今年で設立6年目に入ります。毎年の新年会、ネットワーキングの集い、夏休みのアド街っくオリエンテーリングと、着実に活動の輪を広げてきました。ここに設立以来の「友の会」の活動をご紹介するとともに、ご協力いただきましたゲストスピーカーの皆さまに厚くお礼申し上げます。

ネットワーキングの集い

開催時期		ゲストスピーカー	テーマ
2000年	1月	道下 匡子さん(YP7)	アメリカの心
	3月	植山 周一郎さん(YP9)	世界のVIPを相手に
	5月	関谷 亜矢子さん(YP29)	スポーツジャーナリズム
	9月	鳥飼 玖美子さん(YP10)	日本の英語教育の現状を語る
	11月	津田 倫男さん(YP21)	ベンチャー起業で失敗するには
2001年	5月	長谷川 博さん	アホウドリの復活を夢見て
	9月	深野 加寿子さん(YP11)	アロマセラピーの効用
	11月	塚越 悦子さん(YP37)	国連ボランティア計画
2002年	5月	清水 道子さん(YP9)、ポーラ・ウィルソンさん	異文化体験の面白さ
	6月	馬越 恵美子さん(YP17)	異文化コミュニケーション
	9月	能城 律子さん	国際ラリードライバーとして
	11月	井浦 幸雄さん(YP7)	ベンチャー起業家と投資家の夢
2003年	3月	亀田 紀子さん(YP9)	やるきほんきのキャリア講座
	3月	井尻 憲一さん(YP12)	宇宙メダカ
	5月	リンダ・マシューズさん	在日アメリカ1等書記官とAFS
	5月	田村 毅さん(YP22)	インターネットセラピー
	10月	スカリオン 承子さん(YP11)	NPOマネジメント5原則
2004年	3月	佐々木 尚さん(YP26)	少年ジャンプアメリカへ行く
	5月	秋沢 淳子さん(YP32)	仕事もボランティアも楽しい
	6月	星野 康二さん(YP21)	夢と魔法のDisneyワールド
	11月	浦元 義照さん(YP14)	開発とユニセフの役割
	12月	エシャンタ・アーリヤダーサさん	私の人生を大きく変えたAFS体験
2005年	2月	ウォルフガング・パーペさん	AFSからGlobal governanceへ

新年会

開催時期		ゲストスピーカー	テーマ
2001年	1月	ロバート・フェルドマンさん	コミュニケーションはなぜ難しいか
2002年	1月	榊原 英資さん(YP5)	大調整期の世界経済と日本経済
2003年	1月	上原 恵美さん(YP8)	地方で文化の仕事をして
2004年	1月	山下 美知子さん(YP12)と東京外国語大学フィリピン民族舞踊団	
2005年	1月	榊 裕之さん(YP9)	ケネディの遺言ーその現在的意義

アド街っくオリエンテーリング

開催時期		企画内容
2001年	8月	第1回 都電荒川線貸切電車で下町探訪
2002年	8月	第2回 都電荒川線貸切電車で下町探訪
2003年	7月	第3回 江ノ電で行く鎌倉江ノ島
2004年	7月	第4回 江ノ電で行く江ノ島

バザー

開催時期	企画内容
2004年 10月	友の会インタナショナルバザー(AFS50周年記念事業のひとつとして)

友の会では、ほぼ隔月にAFS事務所会議室でネットワーキングの集いを開催し、様々な分野で活躍しているリターニー等をゲストとしてお招きして、交流を深めています。8月7日(日)には、東京都庭園美術館ホールにて初めてのサロンコンサートを予定しています。皆様のご参加をお待ちしています。今後の活動を継続していくため、ネットワーキングのゲストやコンサートの演奏家候補を募集していますので、自薦他薦のご紹介をどしどしお寄せください。

NEWS

友の会行事に度々ご参加くださいました齋藤 弘さん(YP22)が、山形県知事に当選されました。AFS体験を生かして、ご活躍をお祈りします!

14期生、人生のプライムタイムにミニ・リユニオン

去る2月18日、WHO西太平洋地域事務局長の尾身君がマニラから東京へ一時帰国した機会をとらえ、国会開催中の衆議院議員の塩崎君、インドネシアの津波災害の視察から戻ったばかりのユニセフ駐日事務所代表の浦元君らとともに14名が集まり、尾身君を励ますランチの会を開きました。14期生はただ今55歳前後で人生のプライムタイム。社会で大活躍している人が多いためか、一人ひとりの話がまるで貴重な講義を聞いているよう。それぞれ生きる場所は違っても、再会すると気持ちはいつもあのAFSのピュアな高校生のまま。笑顔と勇気を思い出して、また頑張ろうという気持ちになります。

(渋田(旧姓 荒島)陽子/YP14)

「AFS友の会」新年会（1月22日）でのスピーチより

ケネディの遺言

公民権・平和部隊・知的挑戦=アポロ計画とナノ技術

東京大学生産技術研究所教授
榊 裕之
（YP9 '62-63米国ミネソタ州）

私が米ミネソタ州にAFS9期生として滞在したのは、ケネディ大統領の平和部隊や公民権運動などに象徴される希望の時代でした。留学前は外交官を志望し、国連の第2代事務総長で、没後にノーベル平和賞を受賞したハマーショルド氏の本などを読んでいました。しかし、AFS体験後は専門分野をもって社会に貢献しようと考えて工学分野に進み、研究の面白さに魅せられて、現在に至っています。また、AFS体験のおかげで、自分の研究を通じた国際的な活動が可能になりました。私の息子も、AFSのリターニーです。

ケネディ大統領の多岐にわたる貢献は、様々な方面で実を結んでいます。ケネディが推し進め、月面探査を目指した「アポロ計画」は、現在の社会で不可欠となったインターネットなど、数多くの技術革新を生むきっかけとなりました。また、ケネディが創設した奨学金によって米国で学んだ留学生が、各方面で活躍しています。この中には、昨年アフリカ女性として初めてノーベル平和賞を受賞した、ケニアの環境活動家マータイさんがいます。

このように、世界の技術と学術の発展に、米国は大きく貢献しています。同じように、日本の貢献も少なくありません。しかし、他国の研究者仲間からはよく、“日本は内向きすぎる”と指摘を受けます。私は、日本独自のメッセージ発信に貢献したいと思っています。

サンドイッチ構造とナノ技術

ここで、私が40年間にわたって関わった分野の歴史を交えながら、私の専門であるナノ技術についてお話ししたいと思います。不思議な縁ですが、私たち9期生がオリエンテーションで訪れたカリフォルニア大学サンタバーバラ校（UCSB）は、ナノメートル（10億分の1メートル）という、超微細な世界の研究が盛んなところです。

皆さんがいま日常接しているCDプレーヤーや通信機器には、ナノ技術による半導体レーザが広く使われています。しかし、この技術の原型が登場した1963年当時は、実用には程遠いものでした。この技術の実用化が一気に進んだのは、レーザを作る際に「サンドイッチ構造」を用いることで、性能が格段に高まることが、70年に当時のソ連と米国で発表されてからです。この成果は、旧ソ連のアルフェロフ氏と、米ベル研究所に在籍していた林厳雄氏が、別々に達成したものです。アルフェロフ氏は2000年に、UCSBのクレーマー教授と米TI（テキサス・インスツルメンツ）社のキルビー氏とともに、情報技術社会の基盤技術を築いたとして、ノーベル物理学賞を受賞しています。

半導体レーザのサンドイッチ構造とは、電子（負電荷）の粒を含んだ層（黒パン）と正孔（正電荷）を含んだ層（白パン）で、光を発生する層（ハム）をはさんだものです。この3つの層に電気的な圧力を加えると、黒白パンの電子と正孔が中央のハムに流れ込み、それらがペアになって結合することで光が発生します。このハムの部分の厚さは当初、1ミクロン（100万分の1メートル）程でしたが、最近では10ナノメートル（1億分の1メートル）まで薄くなりました。このナノ薄膜の技術は、私が76年からIBM研究所で一緒に仕事した江崎玲於奈氏のグループと、ベル研究所のグループによって開発され、世界中に普及しました。こういった研究の際に英語に困らなかったのは、AFS体験があったからです。

最先端のナノ技術研究

米国での研究後に東大へ戻り、さらに技術を発展させる努力を続けました。ハムの部分を千切りやみじん切りすることで、電子と正孔をより強く結びつけるオリジナルな着想を得たほか、ハムの中にゴマのようなものを埋め込んだ構造を応用した、最先端の研究も進めています。こういった技術は、盗聴を防ぐシステムなどへの利用が期待されています。

様々な経験を世界に

政治的な安定と高い教育レベルによって経済的な成功を収めてきた日本を始めとするアジア諸国は、世界に大きく貢献できる力をつけてきており、アフリカや中近東などの人々にも、ぜひこういった体験を共有してもらいたいと思います。ケネディのスピーチをホワイトハウスで聞いたAFS生の一人として、多くのリターニーの力を生かして、さらに貢献していきたいと決意しています。

（文責:清水道子 YP9）

2006年派遣
第53期生
募集

異文化を体験しよう！

― 高校生留学のAFS ―

1947年に戦争のない平和な世界をめざして世界で初めて高校生の交換留学制度を発足させて以来、AFSを通じて異文化体験をした若者の数は世界で30万人を超えています。柔軟で多感な高校時代の一年間はその後の人生に多大な影響を与えることでしょう。中・高生の皆さん、今がチャンスです。

33カ国へ旅立つ406名の高校生を募集します。

応募資格

- ●高校1、2年生および中学3年生
- ●異文化体験に対する興味と意欲を持ち、留学先での生活に適応できる資質のある人
- ●応募時に学業成績が中程度以上の人
- ●在学校の学校長から推薦される人

※その他詳しい応募資格については「第53期生応募のてびき」をご覧ください。

出願・選考　2005年度実施予定

	特別選抜	一般選考	支部選考
出願締切	東京　6月13日 大阪　5月31日	前期7月12日 後期9月13日	Ⓐ　7月15日 Ⓑ　随時
選考試験	東京　6月24日～26日 大阪　6月10日～12日	前期7月24日 後期9月25日	Ⓐ　4月15日から7月23日までの間に全国約40支部で随時実施 Ⓑ　4月15日以降、全国約66支部で随時実施

Ⓐ派遣強化道県の支部が対象（要問い合わせ）

参加費　各種奨学金制度あり

北米・オセアニア
ヨーロッパ
118万円

アジア・中南米
88万円

1～4月出発		7～9月出発	
アルゼンチン	5	アメリカ	220
オーストラリア	10	イタリア	12
コスタリカ	8	インドネシア	3
スイス	5	エクアドル	3
タイ	6	オーストリア	3
チリ	5	オランダ	3
ドイツ	10	カナダ	4
ニュージーランド	8	スイス	5
パナマ	3	スウェーデン	5
パラグアイ	3	スペイン	3
ブラジル	6	中国	3
ボリビア	3	チェコ	4
ホンジュラス	3	デンマーク	7
マレーシア	6	ドイツ	12
計81名		ノルウェー	7
		ハンガリー	5
		フィンランド	7
		フランス	6
		ベルギー	8
		（オランダ語圏 5, フランス語圏 3）	
		メキシコ	5
		計325名	

募集人数 406名（予定）

ホームページでも詳細情報をご覧になれます。➡ http://www.afs.or.jp/

お問合せ、資料請求先

東日本事務所
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-16 2F
TEL 03-3357-5835
FAX 03-3357-5841
E-mail info-east@afs.or.jp

名古屋事務所
〒468-0051
愛知県名古屋市天白区植田1-2116
TEL 052-807-7338
FAX 052-807-7349
E-mail info-nagoya@afs.or.jp

大阪事務所
〒564-0027
大阪府吹田市朝日町3-405
TEL 06-6317-3955
FAX 06-6317-3977
E-mail info-osaka@afs.or.jp

福岡事務所
〒814-0006
福岡県福岡市早良区百道2-7-30
TEL 092-821-2005
FAX 092-821-2012
E-mail info-fukuoka@afs.or.jp

事務局より

4月1日より、事務局組織が新しくなりました

- 事務局長
  - プログラム　派遣／受入／調査／トラベル
  - 地域事務所　東日本／名古屋／大阪／福岡
  - 管　理　財務・経理／総務／広報・募金／IT・ボランティアネットワーク

※従来のプログラム支援室がなくなり、派遣の相談業務はプログラム部門が、受け入れの相談業務は地域事務所が担当します。

AFS NEWSの発行が年2回になります

これまで年3回（春・秋・冬）発行していたAFS NEWSを、今年度より年2回（夏・冬）に変更いたします。今後はホームページやメールでの情報配信を充実してまいりますので、ご理解を賜りますようお願いします。

メールニュースを配信しています

AFSの最新情報をメールでお届けします。ご登録手続きを以下のページからお願いします。AFSの活動に興味のある方ならどなたでもご登録いただけます。お知り合いにもご案内ください。
【ご登録】http://www.afs.or.jp/mn/news.html
お問い合わせ：事務局広報（TEL 03-3357-5831）

住所などの変更をお知らせください

同封の「会員連絡用ファックスシート」をご利用いただくか、以下のページから変更手続きを行ってください。
【変更処理】http://www.mmjp.or.jp/afsjapan/henko1.html
お問い合わせ：事務局総務（TEL 03-3357-5831）

個人情報保護について

個人情報保護への取り組みについては、当協会ホームページをご覧ください。
http://www.afs.or.jp/docs/privacy.html
個人情報保護に関するお問い合わせ窓口：privacy@afs.or.jp

年会員の方に郵便振替用紙を同封しています

年会員の方は、同封の郵便振替用紙にて会費のお支払いをお願いします。既にお支払いが完了している場合はご容赦ください。

次回の自動引落し日をお知らせいたします

AFS日本協会奨学金	6月27日（月）
終身会費	
ボランティア奨学金	8月 5日（金）

お問い合わせ：事務局経理（TEL 03-3357-5832）

編集後記　生まれて初めての海外をAFSで体験してから早15年。ただいま、母を連れて里帰りを計画中。ホストマザーと母の誕生日が同じ日付という不思議な偶然に、言葉が全く通じないはずなのに、何かが通じ合っている（らしい）2人を、やっと引き合わせることができます。どんな母娘珍道中になるのか？　準備段階からドキドキです。（笠原）

アートディレクション&デザイン　山本義明（goldfish design）